

「つれづれ」の意味

一

「つれづれ」の意味について考えてみたい。

普通に、「つれづれ」は兼好法師独自の境地であり、また徒然草の全体を支える精神であるとされている。しかし次のような段があることは、実際そういう「常識」と矛盾しないであろうか。

山寺にかきこもりて、仏につかうまつこそ、つれづれもなく、こころのにぎりもきよまるこちすれ。

第十七段

ここで、山寺に籠って仏に仕える境遇こそ、「つれづれ」もなく、心の濁りも清まる心地がする、という。「つれづれ」もなくとは、どういうことであろうか。もし「つれづれ」の境地というものが、「つれづれ」の精神というものがあるとするならば、この段の境地なり精神なりこそ、それではなければならないのではないか。そうでなく

井 手 恒 雄

て、「つれづれ」もなく、というのは、どういうことであろうか。

この場合、もしこの段の「つれづれ」は何でもない普通の「つれづれ」であって、真実兼好法師によって礼讃される「つれづれ」ではない、というようなことをいう人があれば、それは不合理である。同じ徒然草の中でそんな使いわけがされるものではない。それは、どこかおかしい。

結論からさきに言おう。

かつて徒然草文段抄を増補した鈴木弘恭が「つれづれ」について、「本文にはくだしく註したれど、俗にタイクツといふことなり」といったが、今日ではこの考えは否定されている。「つれづれ」に深い意味を考えるようになったのは、故島津久基博士の「『つれづれ』の意義」（『国文学の新考察』所収）以来のことと思われるが、博士は、「つれづれ」を一樣に「退屈」と簡単に言ってしまうのは鈴木弘恭以来のことらしい、といい、「いつのまにか『つれづれ』を『退屈』の一語で掩うてしまふやうになったこと、

そして又それをいつまでも其のまゝにしておくことについて、我々国文学に携る者自らの罪を深く感ずるのである云々。」といい、例の精密な論考をつづられたのである。しかしわたしは逆に、鈴木弘恭の語はもう一度現代に生かす必要があると思うのである。今日、徒然草の読者・研究者は「つれづれ」の語にあまりにも深い意味を与えすぎてはいすまいか。それは実際は案外にも簡単な意味しか持たないのではないか。右の第十七段のごときは、山寺に参籠して仏に仕える境地こそ、手持無沙汰を感じることもなくて心の濁りも清まる心地がする、といっているのであり、「つれづれ」はもともそういうところで「つれづれもなく」といわれて矛盾を感じさせないような、そんなありふれた古語だったのではないか。

二

「つれづれ」の意味について考えるとき、基本になるのは、第七十五段である。「つれづれ」の語は、まず以って序段の書き出しの語として有名であるが、それが深い意味を持つように考えられるのは、思うに第七十五段というものがあればこそである。第七十五段について考えてみよう。

つれづれわぶる人は、いかなる心ならん。まぎるるかたなく、ただひとりあるのみこそよけれ。第七十五段

これは、第七十五段の最初の部分であるが、こういうものをどう理解すればよいのであるか。

わたしの手もとの注釈書を見ると、次のように述べられている。

「冒頭の『つれづれわぶる人はいかなる心ならん。まぎるるかたなく、ただひとりあるのみこそよけれ』というのは、兼好の主張の一つであって、『つれづれ』であることの礼讃である。これに立脚して、この段で人々の酔中の夢の如き生活を批判しているのである。」

（守随憲治著『古典評釈徒然草』）

こういうものを今日疑う人はないように思われる。

わたしははじめにわざと通俗的な参考書類の一冊を取り上げてみた。右の見解は、著者の見解というよりも、今日の徒然草の読者・研究者の「常識」と称すべきものである。現代の徒然草参考書のどれを手にとって、大体同じようなことが書いてあるからである。いずれにしても、こういうものはいわば「定説」になっていて、不審を抱く人もなさそうである。しかしわたしには、どうしても納得がいかないのである。

どこが納得がいかないかというに、こうである。右の第七十五段のはじめの語は、『つれづれ』である事の礼讃であるといわれるが、ほんとうにそうであろうか。それは、『つれづれ』が兼好法師独自の境地であるという、わたし

にいわせれば徒然草の「神話」ともいうべき誤った「常識」に由来する、大きな誤解としか思えないのであるが――。

わたしが思うに、「つれづれわぶる人はいかなる心ならん」は、「ひとりでいると手持無沙汰で困るという人は、どういう気持であろう」であり、「まぎるるかたなくただひとりあるのみこそよけれ」は、「わずらわされないで、ただひとりいるのが何よりいい」である。兼好法師は、『つれづれ』で困るという人の気がしれない。『つれづれ』の境地が一番いいではないか」といつているのではないかと、「ひとりでいるのが一番いいではないか。それは『つれづれ』なんていうもんじゃなくて、とてもいい境地なんだ」といつているのである――。わたしのこの解釈はどうであろうか。

わたしの解釈が今日の「常識」と根本的にちがうところは、「まぎるるかたなくただひとりある」境地を「つれづれ」の境地などと考えない点にある。わたしにいわせれば、「まぎるるかたなくただひとりある」境地は、兼好法師にとって「つれづれ」の境地であるどころか、「つれづれ」をわびなくてすむ境地であり、前記の「つれづれもなく」に近い境地である。

（「つれづれわぶる」は、「つれづれなりとわぶる」『徒然草文段抄』である。何を「つれづれなりとわぶる」かというに、「ひとりある」ことを、である。「ひとりある」こ

とを「つれづれなりとわぶる」事実がなければ、「ひとりある」ことは「つれづれ」ではなくなる。兼好法師は「ひとりある」ことを「つれづれなりとわぶる」人の心なさを指摘するのである。「つれづれ」の境地というものをまず想定しておいて、それがわぶべきものであるかそうでないかを論じているのではない。）

もう一つ、今日世間に流布する参考書類の中から、典型的なものを選んで検討してみよう。

わたしにいわせれば、現代における徒然草研究の混乱は、「つれづれ」の語に辞書的意味以上の一種不可思議の意味を附与したところから生じたものであるが、それがこの種の啓蒙書に典型的に見られると思うのである。実はその辞書的意味といえども、今日においてはわたしのいわゆる徒然草の「神話」にひき廻されて、変なものになってしまっているのであるが。

「つれづれ」について、つぎのような解説が見られる。

「冒頭の『つれづれなるままに……』に基づき書名にもなっている語だが、あの序段の場合に比べこの七五段の用い方には兼好の深い思想が出ていと言われている。この語は普通『退屈』『手持無沙汰』などと訳されていて、序段はそれでも通じないことはないが、橋純一氏によれば、客観的意義（環境の閑散無事な事、生活の単調で変化乏しい事―閑散無事）と、主観的意義（a にかかる環境から生じ

がちなる倦怠の情、更にそれが嵩じた鬱屈の感―退屈・無聊。bかかる環境をすなおに受容し、かみしめてそこに自身の暢達を意識するによって生ずるしんみりとした心境）とに分け、この客観的意義と主観的意義との混融した場合も多いと言っておられる。即ち本段で『つれづれわぶる』のは主観的意義のa退屈・無聊の意だが、『まぎるる方なくだひとりあるのみこそよけれ』はそのbの積極的意義の場合である。この無為・孤独の境界の清閑と自由に積極的価値を見出し、そこにこそ真の生の楽しみがあるとする処に、隠者兼好の思想的立場が最もよく現れている。」

（齊藤純著『徒然草解釈法』）

ここに混乱が見られるというのは、こうである。

ここで「つれづれ」の意味が説かれているが、それは三段に分けて考えられている。

第一は、序段の「つれづれ」である。それについては、「この語は普通『退屈』『手持無沙汰』などと訳されていて、序段はそれでも通じないことはないが」といわれる。徒然草の「つれづれ」をどこまで普通の辞書の意味で押し通せるかというのが、わたしの最大関心事であるが、序段はそれでよいことになる。第二は、第七十五段の「つれづれわぶる」の「つれづれ」である。これも「退屈」「無聊」の意といわれる。つまりこれも普通の意味と考えてよいわけである。第三は、同じ段の「まぎるるかた

なくただひとりあるのみこそよけれ」で、これは単なる「つれづれ」でなく、特別の意味をもつ「つれづれ」であるといわれる。わたしは問いたい、「まぎるるかたなく云々」の、どこに「つれづれ」の語があるというのであろうか。

「まぎるるかたなくただひとりある」境地が「つれづれ」の境地だというのは、早合点というものではあるまいか。わたしの解釈をもう一度くり返すと、「手持無沙汰で困るというが、何にもわずらわされないで、ただひとりであるのはいいものだ」というのである。「ただひとりある」境地は「つれづれ」をかこつべきものではないと兼好法師はいつているのであって、それが「つれづれ」の境地だなどとはいっていないのである。つまり「つれづれ」などといってもいないところで「つれづれ」の意味を考えようとするから、普通の解釈では間に合わなくなり、いわゆる兼好法師独自の「つれづれ」などということになるのである。それは兼好にとっても迷惑なことであり、今日多数の読者にとっても迷惑なことなのである。迷惑といえば、いわゆる啓蒙書である右の注釈書は「この文から『つれづれ』の境地とはどんなものであるか説明せよ」という設問をかけた、みずから「無為・孤独・自由・閑寂の境地」などと解答しているが、ありもしない「つれづれの境地」などについて問われる人々こそ、いい迷惑である。

つづいていわく――

「徒然草の全体が、また僧侶として文人としての多面的な兼好の人間像が、『つれづれ』の精神においてはじめて矛盾なく理解されてくるとも考えられる。それは外部的なきずな（官職・家庭等）から解き放たれて真の自己に直面する時間である。そしてその自己をも投げ棄てて飛び込む処に信仰というものがあるであろう。兼好はこの段でその両者を肯定しているが、知性の人兼好が『つれづれ』の立場にとどまって、その鏡のような心に映る人間社会のよしなし事を静かに書きつづったのが、徒然草ではあるまいか。」

（全右）

ここにいわれる「つれづれ」の精神とは一体何であろうか。徒然草の精神というのならわかる。「つれづれ」の精神などというものがどうして考え出されるのであろうか。わたしが思うに、徒然草第七十五段の境地は、たしかに兼好法師独自のものである。しかし、それはなぜ「つれづれ」の境地と呼ばれたり、「つれづれ」の精神といわれたりしなければならないのであろうか。「つれづれ」の境地だとか「つれづれ」の精神だとか、第七十五段のどこにも書かれていないのではないか。

ほんとうのところ兼好法師は、「ただひとりある」境地のよさを礼讃し、その境地に「つれづれ」すなわち退屈・手持無沙汰を感じる人の心なさを歎じたのである。「つれづれわぶる」人は、どうしてそうなのだろうと、たしなめ

るような口調でいったのである。兼好法師は「ただひとりある」ことによるこびを見出しているが、それを「つれづれ」の境地だとか「つれづれ」の精神だとか、決して名づけていないのである。そうとるのが第七十五段を正しく解釈することであり、「つれづれ」の語を正しく解釈することであると思うのである。

（ついでにいうと、兼好法師が「よしなしごとを静かに書きつづった」というのはおかしいと思う。兼好法師が「よしなしごとを……書きつくれば」と言うのは卑下してのことである。現代でいえば人に物を贈るのに「つまらないものをお届けします」と言うようなものである。それを「あの人がつまらないものを届けたそうだ」とは言わない。それと同じである。）

わたしは、今日徒然草の読者・研究者は「つれづれ」の語に深遠な意味を附与する前に、それをすなおに辞書的な意味で解釈することを考えなければならぬと思うのである。

三

多くの人が、「つれづれ」の語の解釈と徒然草そのものの解釈とを混同してしまっているきらいがあるようである。

「つれづれ」の語の解釈としては、本居宣長の次の語が有名である。いわく、「おなじさびしさも『つれづれ』と『さうさうし』とは、意異なり。『つれづれ』とは、すべきわざのなくて、ひまにてさびしきをいひ、『さうさうし』、

とは、あるべきことのなくて、たらぬがさびしきをいへり。
このけじめを心得おくべし。」（『源氏物語玉の小櫛』）と。

これは「つれづれ」「さうざうし」二語の多くの用例から
帰納した、信ずるに足る解釈である。ところが徒然草の研
究者・注釈家たちは、徒然草の中にわずかしかない「つれ
づれ」の語を解釈するのに、徒然草そのものの解釈を以っ
てそれに当ててしまったと思われるふしがあるのである。

「つれづれ」の意味が本格的な研究書の中で次のように
説かれることがある。

「彼は『名利につかはれて、しづかなる暇なく、一生を
苦しむるこそおろかなれ』（第三十八段）とも言っている。
彼は『しづかなる暇』そのものに大きな意義と価値を認め
ている。『つれづれ』はこのしづかなる暇のもたらす境地
なのである。『つれづれ』は人生における一つの休止や間
隙を意味するものではない。それこそが真実なのであると
いうのである。兼好は『つれづれ』にただならぬ人生的意
義と価値とを見出しているわけなのである。」

（富倉徳次郎著『類纂評釈徒然草』）

ここでわたしが特に注意したいのは、第三十八段のよう
に「つれづれ」の語を持たない段で「つれづれ」が説かれ
る、それは「つれづれ」の語義の説明を目的とするもので
あるならば、はなはだ危険ではないかということである。
「『つれづれ』はこのしづかなる暇のもたらす境地なので

ある」というのは、正確にいえばこの注釈書の著者の解釈
であって、兼好法師その人の見解ではない。あるいは、兼
好法師その人のあずかりしないところであるかもしれない。
い。その点、用心しなければならぬと思うのである。総
じて言えば、言語解釈としてどこか根本的な誤りがあるよ
うにわたしには思われるのである。「つれづれ」こそ人生
の真実であって、兼好法師その人はその「つれづれ」にた
だならぬ人生的意義と価値とを見出した云々 という、そ
の根拠はどこにあるのであろうか。

徒然草それ自体の数少い用例は、「つれづれ」がそれほ
どの妙境であることを主張するものではなく、時にはその
逆でさえあるようである。問題になるのは、「つれづれ」
の語が微妙な用い方をされている、第七十五段だけである
ようである。われわれの解釈から生まれた「つれづれ」で
はなく、その微妙な兼好法師自身の「つれづれ」が徹底
的な吟味の対象でなければならぬものようである。

念のため、徒然草の用例の全部にあたっておきたい。

つれづれなるままに日ぐらしすずりにむかひて：序段

これは、前に述べたように、「退屈」あるいは「手持無
沙汰」と訳して、それで意味が通じるとされている。

「われはさやは思ふ」などとあらそひにくみ、「さるからさぞ」ともうちかたらはば、つれづれなくさまめと思へど……

第十二段

ここでは「つれづれ」が、慰められることを欲するものとされている。妙境などというものではない。

仏につかうまつるこそ、つれづれもなく……第十七段

前述のとおり、逆に「つれづれ」がないということがよろこばれているのである。

女のはばかりことあるところに、つれづれともりゐたるを……

第一百四段

この「つれづれ」も、王朝以来の「つれづれ」である。

をかしくも、きらきらしくも、さまざまに行きかふ、見るもつれづれならず。

第百三十七段

ここでは「見るもつれづれならず」と、「つれづれ」でない状態がよろこばれている。

おなじ心にむかはまほしく思はん人のつれづれにて「いましばし。けふは心しづかに」などいはんは、このかぎりにあらざるべし。

第百七十段

ここも普通に「よく気が合って、対談していたいと思う相手の人が、ちょうど退屈なときで」（石沢胖著『徒然草の新解釈』）などと訳されるところで、問題はない。

つれづれなる日、思ひのほかは友の入り来て、とりおこなひたるも、心なぐさむ。

第百七十五段

無聊をかこつ折から、たまたまおもいがけぬ友人がやって来て、酒宴を催すのも、心が晴れるものだ——、というのであるから、これも兼好法師独自の境地などではない。この段など、前掲の「無為・孤独・自由・閑寂の境地」式に解すると、友人が来てくれたので一しよに酒をのんで、それによって自分の心が晴れたという結びが生きない。

以上のように見てくると、問題はただ第七十五段だけで、それも「まぎるるかたなく、ただひとりあるのみこそよけれ」が、兼好法師自身によってほんとうに「つれづれ」の境地とされているか否かという点にしばらくはられてくる。それについてわたしは前述のとおり否定的なのであるが、これ

も前述のとおり、今日徒然草の読者・研究者の間では、何ということなしに兼好法師自身による「つれづれ」の礼讃と信じて疑われないのである。

次のようにもいわれる――

「この段の『つれづれ』は、名詞である。『まぎるるかたなく、ただひとりある』境地である。その境地は必ずしも『誠の道』を知った境地ではないが、しかしそこに世俗との『縁を離れて』閑かな生活があり、心の安らかさがあるという。そして兼好はこれを『暫くたのしむ』といえると言っているのである。彼にいわせれば、『つれづれ』こそ、この人生のたのしみの時なのである。『生活・人事・伎能・学問』は仮象的な人生の営みに過ぎず、『つれづれ』こそ人生の本質的な時なのである。人間が現象的なことから解放されて、永遠の世界に、我が実相を観じる時なのである。一歩踏み入る時なのである。」

（富倉徳次郎著『類纂評釈徒然草』）

わたしは思う。兼好法師はたしかにそのような真実の境地なり時なりを考えていたにちがいない。しかしその境地なり時なりを「つれづれ」とよぶのは研究者・注釈家の「恣意」であり、恐らく兼好法師のあずかりしらぬところである。兼好法師自身は、そのような境地なり時なりを、逆に「つれづれ」をわぶるにおよばぬもの、「つれづれ」をなぐさめられるもの、つまりは「つれづれ」ではないも

の、と考えていたにちがいないと思うのである。

四

「つれづれ」は兼好法師独自の境地であり、「まぎるるかたなくただひとりある」境地がそれであると、最初強く主張した人は島津博士であると思うが、どうであろうか。わたしはそれに対し今日における「つれづれ」の意味の論を、博士がその相手として意識された鈴木弘恭の時代にまで引き戻す必要があると考えるものであるが。

兼好の「つれづれ」は畢竟兼好の「つれづれ」である。古典のそれや漢字の「徒然」と全く同じである必要はない。作者自身の説明にきくのが一番いい方法であるまいか――。島津博士はそう言って、「つれづれわぶる人はいかなる心ならん云々」の語を引いて「つれづれ」の意味を説明した上で、次のようにいわれるのである。いわく、「若し『つれづれ』が『退屈』だとすれば、それを兼好に好ませておく註釈家たちは、少々悪戯が過ぎよう」（『国文学の新考察』二九―三〇ページ）と。その意味は、兼好法師は「まぎるるかたなく、ただひとりあるのみこそよけれ」といって、その「つれづれ」を好んでいる。もしその「つれづれ」が単に「退屈」というようなものであるなら、兼好法師がそれを好むはずがない、というのである。わたしにいわせれば、兼好法師が「退屈」を好むはずがないからこそ、ここは兼好法師が好むのは「ただひとりあ

る」境地ではあっても「つれづれ」であることではないのではないか、ということになると思うのであるが。それはともかく、島津博士は、「つれづれ」は早くいえば「退屈」であるという、鈴木弘恭以来の「通念」（もちろん博士の在世中の）をしりぞけて、「つれづれ」を深遠な意味を持つものとされる。と同時に、兼好の「つれづれ」はすなわち「まぎるるかたなく、ただひとりある」状態であるとされる。こうして、今日における、第七十五段をほとんど唯一の根拠とする「つれづれ」の境地、「つれづれ」の精神の論は、島津博士がその開祖であることが察せられるが、博士の「つれづれ」の論は、次のように展開するのである。

いわく、「……兼好の『つれづれ』はまぎるゝ方なく、たゞ一人ある状態である。心を捉へらるべき外部生活の世から暫く全く解放されて、一人静かに自分を見つめることの許された時間ではなからうか。」と。またいわく、「『紛るゝ方なくたゞ一人ある』状態が、平静で幸福な意識に満ちてゐるときが『のどやか』で、精神活動がその中心となるべきはつきりした対象を獲ずに、何処かに満たされぬ孤独の感に支配されるときが『つれづれ』ではなからうか。そして、この二つの心地の相異は、大体に於て前者は紛るゝ方なくといふ感じにおいて勝ち、後者はたゞ一人ある感じが強く意識されるところにあるのではなからう

か。」と。またいわく、『『つれづれ』は静観の許された時間である。内察の自由を与えられた時間である。心ゆくばかり自分をながめ、いつくしむことの出来る時間である。偽りなき自分の心の姿を直視することの出来る時間である。ほんたうに自分の生を、存在を、ほんたうに全き独りの命を、力を、感ずることの出来る唯一の世界である。そして『もののおはれ』をほんたうに感ぜしめられるのは、唯此の時である。不滅の真理に触れ、久遠の信仰に入る機縁がほのかに芽ぐんで来るのも此の時である。』（全右三三―三八ページ）と。

たしかに博士の論は、徒然草論史に一時期を画するものであり、また今日の徒然草論の基礎をなすものでもある。しかしまたそれだけにその影響するところが善悪ともに大きいと思われるのである。右の博士の文章を読んで感ぜられることは、「つれづれ」が徒然草の全体を以って解釈されるところというものになるのか、ということであり、それゆえにまた、「つれづれ」の語の解釈と徒然草そのものの解釈とが混同されることがいかに危険であるかということである。

兼好法師は、これは「つれづれ」の筆のすざびであると称して、徒然草を書いた。その徒然草は閑寂の境を理想とする。だから兼好法師においては「つれづれ」は閑寂を意味する。兼好法師はまた「よしなしごと」を書きつけると

いってそのすぐれた随筆を書いた。だからかれにおいては「よしなしごと」はただの「よしなしごと」ではなく、かれ自身の深い意味を持つ——。そう考えるのは、ことばの解釈の問題として、どこか方法的に致命的な誤りがあるのではあるまいか。第七十五段についていえば、「まぎるるかたなく云々」の境地が「つれづれ」の境地であると考えるのは、あるいは「つれづれ」の境地とは「まぎるるかたなく云々」の境地であると考えるのは、その致命的な誤りをそのまま引き継ぐものではないか。島津博士の見解そのものについていうと、それはそういう誤りをそのままにした上で、徒然草鑑賞の成果のすべてを「つれづれ」の一語に荷なわせ、世にも深遠な「つれづれ」の論を展開させたものではなかったか。今日も、「つれづれ」はありふれた古語ではなく、兼好法師が独自の意味づけをしたことばであると信じている人が多いが、それは博士の誤りをそのまま受けついだものといわねばならないのではないか。

ことばの解釈の問題としていえば、われわれはある語をまず以って辞書的意味においてとらえるということが大切なのではあるまいか。われわれは兼好独自の何々というような自分自身の発想に酔うて、案外真実を見誤ることが多いのではあるまいか。実際、独自のものは内容であって、ことばではないのに。そういう意味で、わたしは島津博士の次の語は、その意気ごみにかかわらず今日根本的に批判さ

れねばならないものであると思うのである。きつくいえば、博士のそのような発想が今日の徒然草論の救いがたい混乱を生んだものとして。

引用が長すぎないようにある程度にとどめなければならぬが、博士の語はカッコの中を特に注意して読み味わねばならないと思うのである。

「上に述べたやうな解釈は、それぞれの場合に於ける、単なる辞書の註解のみでは出来得ない。（ほんたうの意味からいへば、文の解釈は如何なる場合に於ても、常にさうであるべきではあるけれど）。作品全体、或場合には作者のあらゆる意味での全生活、を知らねば試み得ない方法ではあるが、そして又これは我々が作品を通して作者の心の奥に直に飛び込んで行くことが出来れば、たやすく遂げ得られるところの作業であるべきであるが、しかし又作品がよく理解せられる為には、やはり正しい解釈が必要である。一語一句にも滲み込んでゐる作者のたましひを、生活を、心の声を、姿を、あやまりなく知り得、感じ得る為には、ほんたうの意味の註解は唯一つのこれが開扉の秘鑰でなければならぬ。結局完全なる理解は即ち完全なる釈義であり、完全なる釈義は又やがて完全なる理解でなければならぬ筈である。……」

（全四四ページ）

博士が、「つれづれ」の語の解釈は「単なる辞書の註解のみでは出来得ない」と主張されるかたわら、（ほんたう

の意味からいへば、文の解釈は如何なる場合に於ても、常にさうであるべきではあるけれど。）といわれるのは、博士の矛盾をそのまま示すものとして、實際注意して読み味わわれねばならないと思う。

（ほんとうのところわれわれは言語の解釈に際しては「常にさうあるべき」方法に従わねばならないのである。）「つれづれ」の語は、もともと辞書の意味以上の意味を持たないのである。それに辞書の意味以上の意味を考えようとするから、それは辞書の意味以外の意味になってしまふのである。そこに分裂があるのである。博士の矛盾があるのである。徒然草「神話」の発生があるのである。「つれづれ」の語義を知るためには、徒然草の全体を知らねばならぬ、徒然草の全体を知るためには「つれづれ」の語義を知らねばならぬ——、そのことはよいでしょう。実際には、徒然草の全体を以って「つれづれ」の語義を推すこととなり、ついに「つれづれ」はその辞書の意味を離れて、深遠といえば深遠、曖昧といえば曖昧な、一個の文学用語となり終るのである。

（一九六五・一・二二）